

わたしと遺伝と教育と みんなちがって、みんないい

名古屋大学医学部附属病院

卒後臨床研修・キャリア形成支援センター/小児科

村松 友佳子

私は小児遺伝を専門として、大学病院の教育部門と小児科に現在所属しています。ちょっと前までは、自分が常勤で勤めるなんて、ましてや大学の教員をするなんて、夢にも思いませんでした。思い返せば、私のキャリアは全て偶然が重なって起こったものでした。

スーパーローテートの初期研修を終える頃、新生児科部長から、NICUの専属スタッフとして残ることを提案いただき、3年目からNICUにどっぷりと浸かりました。NICUでは合併症を持つ患者さんをたくさん担当させていただきました。染色体異常や先天異常症候群を基礎疾患にもつ患者さんも多く、これらについてもっと学びたいと思ったのが、小児遺伝の世界に足を踏み入れたきっかけです。小児科専門医を取得後、第2子出産を機に常勤からは外れましたが、非常勤という立場でも、細々と遺伝医療に関わり続けました。とりわけ学会などで、臨床遺伝を志す同年代の小児科医と繋がれたことは、非常に励みになりました。

国内留学の夢も、海外渡航の夢も破れましたが、キャリアを応援してくださった指導医のもと、臨床遺伝専門医を取得し、また、数か月ごとに信州大学遺伝医学教室に通い、関わった患者さんについて論文を執筆することができました。当時は、研究なんて自分には縁がないと思っていましたが、遺伝医学教室での出会いが、大学院に進学して基礎研究に携わるきっかけとなりました。

学位を取得し、再び非常勤生活を続けていたところ、大学病院で、教育と診療を半分ずつの-effortで行う新しいポストの話があり、病院助教に着任することになりました。実は、私は人に教えることはあまり好きではありません。というか、むしろ苦手です。しかしながら自分にできることからやってみようと、医学科臨床実習に遺伝カウンセリングロールプレイを取り入れたり、また課外でも、小中学生とその家族を対象に遺伝教育を試みたりしました。先達のない中、苦手なことをやるのは辛かったですが、組織を動かし、やったことを評価してもらえた時にはとてもやりがいを感じました。

任期は5年の予定でしたが、最終年、新しい上司が着任したことをきっかけに、医学教育もキャリアとして続けることを決意しました。京都大学のFCME（現場で働く指導医のための医学教育学プログラム）を受講したり、仲間とワークショップを企画したり、地方厚生局や文科省の仕事の一端に関わらせていただいたことは、医学教育に限らず、自分の活動を俯瞰的に見つめる機会となりました。一見、自分の専門と関係ない分野でも、研鑽を積むと全てが有機的に広がっていくのを感じます。

私生活でも色々ありました。今の自分があるのは紛れもなく、小児科の仲間、新生児の仲間、遺伝の仲間、医学教育の仲間、恩師、友人、そして家族のおかげです。これまでのキャリアを振り返った時、計画的偶発

性理論というキャリア論に出会いました。キャリアの80%は偶然の出来事によって決定される、という理論ですが、これを計画的に起こす人には、行動特性として、好奇心・持続性・柔軟性・楽観性・冒険心が必要だとされています。人生は1度きりしかありません。人によって置かれた状況はさまざまです。できる時に、できる事を、無理をせずに、やるからには楽しく—これは私が関わったPTA活動のモットーですが—これからも仕事と趣味を続けていきたいと思います。

【著者略歴】 村松 友佳子 (むらまつ ゆかこ)

2000年 名古屋大学医学部医学科卒業 名古屋第一赤十字病院

2004年 国立病院機構名古屋医療センター

2010年 愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所

2012年 名古屋大学大学院医学系研究科 神経遺伝情報学

2014年 名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター新生児部門

2015年 同 卒後臨床研修・キャリア形成支援センター/小児科 病院助教

2022年 同 病院講師、名古屋大学大学院医学系研究科総合医学教育センター兼務

【所属学会】 日本小児科学会、日本小児遺伝学会、日本人類遺伝学会、日本遺伝カウンセリング学会、日本先天異常学会、日本周産期新生児医学、日本新生児成育医学会、日本医学教育学会

【専門医・資格】 小児科専門医・指導医、臨床遺伝専門医・指導医、文部科学省高等教育局医学教育課 技術参与
日本小児遺伝学会評議員、日本人類遺伝学会評議員

【家族など】 夫（小児科医）、長女、長男、次ニャン
楽器演奏（ピアノ・ビオラ）、動物（馬・犬・猫）、生いちじく、ゆるいもの、が好きです。

～ダイバーシティ・キャリア形成委員会より～

「医師としてのリーダーシップを育む」

リーダーシップとは何か？という問いに対する答えは、決して簡潔なものではありません。あえて言うならば、「他者に影響を与える人格、ビジョン、そして実行力」であり、それは生涯をかけて学び続けるものです。我々医師にとって、リーダーシップとは先天的な資質ではなく、後天的に習得可能なスキルや能力、価値観の集合体によって生まれる「現象」です。それを医師として育むことは一朝一夕で成し遂げられるものではありませんが、いくつかのキーポイントがあります。例えば、①熱意・一生懸命さ、②学術的ネットワーク作り、③コンフォートゾーンから踏み出す行動力（チャレンジ精神）、④コツコツと諦めずに続ける実行力、⑤楽観的な姿勢（完璧主義を捨てること）、⑥コミュニケーション能力、⑦エモーショナル・インテリジェンスなどです。本コラムには、①～⑦のスキルを駆使しながら計画的偶発性を味方にキャリアを切り開かれていった様子が綴られています。

日本では、医師がキャリアを積む中で、これらのリーダーシップ・スキルを系統的に学ぶ機会は限られています。しかし、自らの医師としての歩みを「リーダーシップ」という視点で見つめ直してみることで、これまでとは違った風景が見えてくるのではないのでしょうか。